

スーパー読者の
経営力が選ぶ

あの商品この技術 22

60歳までの残る20作で目標到達を志す浅野真英氏。積極的に新しい技術を導入する創意工夫の農業経営は、父親の「外に学べ」という教えと、面積に恵まれながらも常に作業に困難が付きまとう大潟村という環境だからこそ育まれたものだ。



秋田県大潟村

浅野真英 氏

【経営データ】

■年間売上／5000万円 ■経営面積／33ha ■生産作物／コメ21.3ha（あきたこまち）。もち米10ha（わたぼうし、たつこもち）。畑作3ha（黒大豆、黄大豆、小豆）
■労働構成／本人、父 ■売り先／コメは直売と小売・卸で比率は半々。もち米は小売・卸で、豆類は加工業者などへの直売。

※■の数字は資料請求番号です

収穫したコメの乾燥は60石2台と53石1台の計3台で。自作グリーンコンテナを積んだダンブを写真▲の大型ホッパにバックで付け、収穫物を一気に張り込む。投入された籾は、所定の乾燥機にシャッターで振り分けられる。収穫は1日およそ4ha弱（田1枚半）で、この3台の処理能力に対応している。浅野氏はコメの品質を高いレベルで維持することに腐心しており、土質が異なる田に移る際は、途中で作業を終える。砂質が混じる田でとれたコメは、最初の味はいいが劣化が早く梅雨を越すと極端に食味が落ちるため、等級検査で通るギリギリの15.5～15.9%の水分率で乾燥し優先的に出荷する。業者へは使い捨てのフレコンで玄米出荷。しかし、一部紙袋出荷もあるため、排出口は2系統（写真▼）にしている。現在、排出した玄米を一時的に貯めるタンク（写真▲）を自作しており、これにより頻度の多い紙袋への投入の煩わしさを軽減する狙い。



乾燥機用ホッパ
（▲金子農機株）「ビックホッパー-RG200EW」



浅野真英氏は現在40歳。60歳を農業をやめる区切りと考えているので、残るコメ作りは20作しかない。

「そう考えると一年一年が勝負。自分の個性を生かした品質を維持したまま、最低50ha、できれば100haの大規模経営を目指している」

浅野氏が経営を継いだとき、父親は「自分が教えたなら自分の年まで自分を越えられない。他人から学べ」と突き放した。だから浅野氏の学ぶ目は、常に外側に向けられてきた。

「面白そうな経営をしている人がいると聞くと、どこだって名刺片手に行ってみるんです。まともに機械が走らない底なし沼で農業をやった大潟村の歴史は重い。しかし、その中で確立された作業体系だけに固執しては新しいものは生まれません。父親の教えが利いたのか、プラスアルファのエッセンスはいつも外側にあるって思うんです」

そんな浅野氏は、有効だと知れば新しい技術を導入することを厭わない。大型フルクローラとレーザールベラの使用は7年前に遡り、今では



左図レーザーレベラ(スガノ農機株)「LL5000」 右図モミサブロー(スガノ農機株)「SPF12」



図フルクローラトラクタ(三菱農機株)「GCR160」

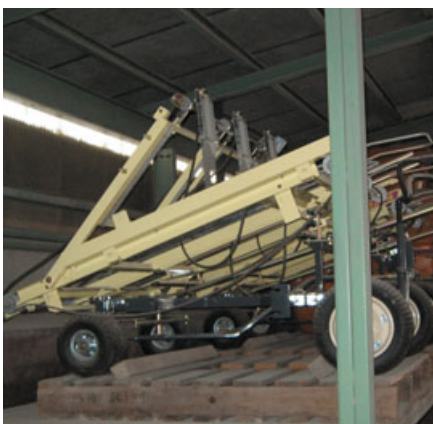
浅野氏の圃場は、もともと河川が八郎潟に注ぐ河口付近に位置しており、肥沃な反面、堆積土中心で大潟村の中でも特に土の粒子が細かく沈みが深い。この中で作業するにはフルクローラの選択は絶対で、国産最高馬力の三菱製160馬力を選んだ。このような圃場条件のため、浅野氏はレベリングだけではなく、プラウ、溝掘り、代かきまで、どの作業機にもレーザー受光器を取り付けられるようにしており、レーザー制御で作業精度を高めている。浅野氏がレーザーを使い始めたのは7年ほど前。しかしその有効性を知った他の生産者がそここでレーザーを使用するようになったため、今や大潟村は“レーザー銀座”。レーザーにはチャンネルがなく、誤差を最小限にするために1台の発光器を複数の生産者で使うことも珍しくない。多いときは5cmごとに基準点が設定されていることもあるという。そんなときは、キャビン内から受光器の高さを設定できる「デジ棒」(写真➡)を使ってトラクタの屋根から2mも高い位置でレーザーを受信することもある。枕地付近の排水の悪さは常に悩みの種。写真↑右側のモミサブローで暗渠に対して直角に何本も簡易暗渠を施工改善を図る。写真➡は、作業幅6mの大型代かきハロー。レーザーレベラで全面無代かきにしたところだが、一部焼き物の土のように乾くとカチカチに固まってしまうところがあるため、このハローを使って代かきで均平をとる。



図ドライブハロー(小橋工業株)「ジャンボハロー-PHL600」



大潟村の田は1枚約2.5haで全面積は2万2024ha。広大な面積を誇る反面、超グライ層が土中の大半を占め沈みが深い。大潟村の歴史が示すとおり農業生産を成立させるためには、常に創意工夫が求められてきた。



図苗箱並べ機(株)タイショー「BJX-4」 証中。

劇的な省力を可能にしたのがこの苗箱並べ機。4箱一度に並べることができ、通路を挟んで左右8列並べるハウスの片側を一度に並べられる。この機械を使うまで、播種後の苗箱並べは数人のパートを使っていたが、導入後父親と浅野氏のふたり作業に。ハウスで箱を並べる浅野氏のもとに父親が2台の軽トラを使ってピストン輸送する。そうすることで、午前中に播種した約1200の苗箱を、昼食を挟んで3~4時までには並べ終えることが可能になった。浅野氏は雑草と砂埃対策のため地面にラプシートを敷くが、この作業を苗箱並べと一緒にできないかと、同機の下にシートのロール取付用ガイドを自作で追加した。適度な負荷をかけないとシートが繰り出されないため、現在ガイドの角度を検

大半の作業をレーザー制御で行っている。硬盤を破ればどこまでも沈む田では、表層の均平だけではなく作土を均一にするレーザープラウの意義が大きい。プラウ耕の下にできる硬盤をストッパにして作業機を走らせるため、硬盤が同じ深さに位置することはその後の作業精度に大きく影響するためだ。さらに、作土が均一になれば生育の揃いが安定し、根の直根性が促進するため、肥沃な土中からより多く養分を吸って食味が向上する。もっとも今ではプラウ、レベラなどの作業を重ねた結果、田の沈みは最小限に抑えられている。こうして確立された幅のある技術体系は、営業のカードに変わる。「自分のコメはうまいと思わなければ営業はできないが、相手にもそれを認めさせるには、自分の自信に説得力を添える技術的な裏付けがいる。それがないと足元を見られる」この自信を守るため、自分で決めた品質レベルは絶対に崩さない。収穫後、圃場の特性に応じ乾燥の度合いを区別し、選別網を3種に分けてどこまで自分の名前を出せるか毎年吟味する。また他の産地のコメと食べ比べ、自分のコメがどの位置にあるかを客観視することも忘れない。残る20作への意気込みが浅野氏の志を高めているのだ。(野村大樹)